

ウラル諸語の参照文法書について

松本 亮

On Reference Grammars of Uralic Languages

MATSUMOTO, Ryo

Keywords: reference grammar, Uralic languages, Finish, Nenets, Russian grammar

キーワード: 参照文法書, ウラル諸語, フィンランド語, ネネツ語, ロシア語文法

1. ウラル諸語の参照文法書の地域的特徴
2. フィンランド語の記述文法書
3. ロシアにおける文法記述の状況
4. まとめ

1. ウラル諸語の参照文法書の地域的特徴

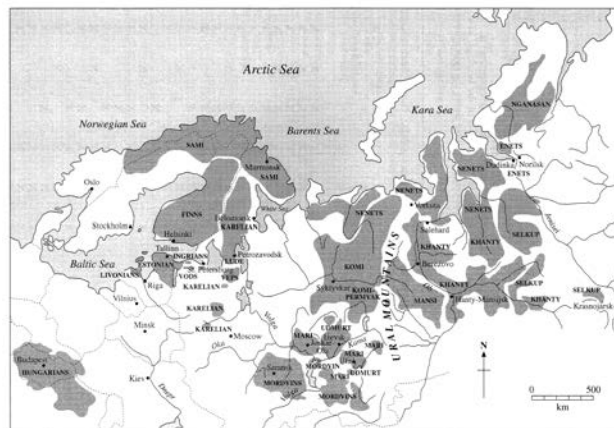


図1 ウラル諸語の分布 (Marcantonio 2002)

松本亮. 2022. 「ウラル諸語の参照文法書について」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』.(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 201-211. DOI: <https://doi.org/10.15026/116966>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

ウラル諸語は、図1の分布に見るように、西のハンガリー語やフィンランド語、エストニア語から東はネネツ語やセリクブ語など、ユーラシア大陸に広く広がっている。ハンガリー語、フィンランド語、エストニア語は、現在ではそれぞれの言語を主たる公用語とする国家があり、言語学的な研究も進んでいると言える状態であるが、その他のウラル諸語はこれまでロシアの国内における少数派言語としての地位でしかない。話者数は表1に示してあるように言語によって大きな差があり、モルドヴァ語、マリ語、ウドムルト語のように自治共和国を持ち、十分な話者数を誇る言語から、マンシ語やエネツ語のような消滅に瀕した言語までである。しかしいずれにも共通するのは、ロシア語の影響を受けた言語使用状況であることと、言語の記述についても主にロシア式の文法記述が中心的に見られることである。確かに、同じウラル語族であるハンガリーやフィンランドの言語学者による研究にも古い歴史があるが、参照文法書という点から見ると、特にソ連による影響が強い時代が長く続いたことを考えれば、世界的な新しい言語学の潮流を受けた参照文法書は近年になってからであると言えよう。

以下では、まず2節でフィンランド語の参照文法書を取り上げ、3節でネネツ語の参照文法書について述べる。いわば、フィンランド語の文法記述は日本におけるそれと同じような立場、つまり非ロシア的記述の例として挙げるものである。そして、ネネツ語は、ロシア的記述の例、特に、少数民族言語として母語話者よりも非母語話者であるロシア人によって文法記述がなされてきた例として取り上げる。

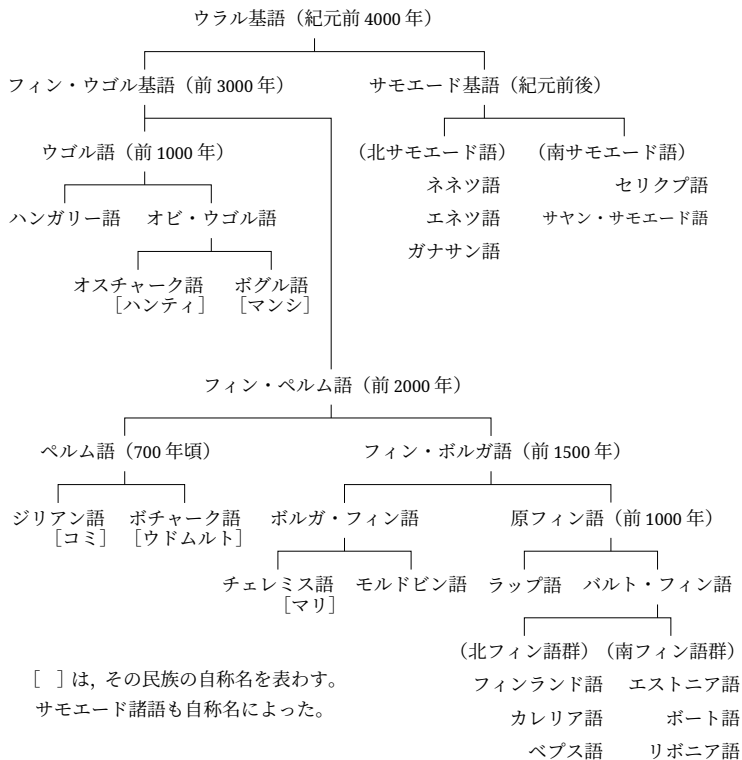


図2 ウラル諸語の系統関係 (小泉 1991 pp.2-3 に基づく)

表1 ウラル諸語の話者数と母語保持率

(上の5言語は wikipedia より、それ以外は2012年のロシア国勢調査より)

	民族人口	全話者数	民族語保持	保持率
ハンガリー語		13,000,000	(データなし)	
フィンランド語		5,400,000		
エストニア語		1,100,000		
サーミ語		30,000		
リーヴ語		<i>extinct in 2013</i>		
カレリア語	60,815	25,605	(21,017)	35%
ヴェプス語	5,939	3,613	(2,362)	40%
ヴォート語	64	68	(14)	22%
イジョール語	266	123	(68)	26%
モルドヴァ語	744,237	392,941	(362,885)	49%
エルジャ	57,008	36,726	(36,202)	64%
モクシャ	4,767	2,025	(1,864)	39%
草原マリ語	547,605	365,127	(345,262)	63%
山地マリ語	23,559	23,062	(22,470)	95%
ウドムルト語	552,299	324,338	(298,628)	54%
コミ語	228,235	156,099	(137,934)	60%
ジリヤン				
ペルム	94,456	63,106	(58,693)	62%
ハンティ語	30,943	9,584	(8,865)	29%
マンシ語	12,269	938	(834)	7%
ネネツ語	44,640	21,926	(19,567)	44%
エネツ語	227	(36)	(36)	16%
ガナサン語	862	125	(93)	11%
セリクブ語	3,649	1,023	(945)	26%

2. フィンランド語の記述文法書

フィンランド語の文法書のうち、主に英語（や日本語）で参照が可能なものに以下のものがある。①は Routledge の Descriptive Grammar シリーズということもあり、参照文法書に適した内容、構成となっている。他の言語の記述と比較できるということも有用と言える。②はウラル諸語の個々の言語について書かれた辞典的な構成で、それぞれの文法記述の量は多くないため、網羅的で参照可能かという点から見ると、足りない点は否めない。しかし、従来の文法記述とは異なるような視点からの記述も見られ、興味深い内容である。③はもともとフィンランド語で書かれている文法の英語訳であるが、最もよくみられる文法内容となっていて、特にフィンランド語を学

習する際の文法書 (④, ⑤, ⑥) の構成, 内容ともほぼ同じとなっている。

- ① Sulkala, Helena, Merja Karjalainen (1992) *Finnish*, Routledge (Descriptive Grammar Series), London and New York.
- ② Abandolo, Daniel (1998) “Finnish” in *The Uralic Languages* ed. by D. Abandolo, Routledge, London and New York.
→ *Colloquial Finnish*, Routledge (1998) でも同じ分析
- ③ Karlsson, Fred (2008) *Finnish—An Essential Grammar* (2nd ed.), Routledge (Essential Grammar Series), London and New York.
← (2009) *Suomen Peruskielioppi* (Neljäs, laajennettu ja uudistettu painos), SKS, Helsinki.
- ④ White, Leila (2008) *A Grammar Book of Finnish* (2nd ed.), Finn Lectura, Helsinki.
← (2008) *Suomen Kielioppia Ulkomaalaisille* (7. painos), Finn Lecture, Helsinki.
- ⑤ 小泉保 (1983) 『フィンランド語文法読本』, 大学書林, 東京.
- ⑥ 吉田欣吾 (2010) 『フィンランド語文法ハンドブック』, 白水社, 東京.

例えば, ①と③の文法記述の構成を対比してみると表2のようになる。

表2 文献①と③の間の相関

①Sulkala & Karjalainen (1992)	③Karlsson (2008)
	(Ch1. Introduction)
Syntax	(Syntax)
1.1. General questions	Ch7 Sentence structure
1.2. Structural questions	Ch8 The nominative case and the partitive case
1.3. Coordination	Ch9 The genitive case, possessive suffixes and the accusative case
1.4. Negation	Ch10 The six local cases
1.5. Anaphora	Ch11 Other cases
1.6. Reflexives	Ch19 Comparison of adjectives
1.7. Reciprocals	
1.8. Comparison	
1.9. Equatives	
1.10. Possession	
1.11. Emphasis	
1.12. Topic	
1.13. Heavy shift	
1.14. Other movement processes	
1.15. Minor clause types	
1.16. Word classes	

2. Morphology	
2.1. Inflection Noun inflection Pronouns Verb morphology Adjectives Postpositions/prepositions Numerals/quantifiers Clitics (1.16. Word classes, 2.2. Derivational morphology) (1.16. Word classes)	Ch3 Word structure Ch5 The declension of nominals Ch13 Pronouns Ch6 The conjugation of verbs, Ch14 Tenses, Ch15 Moods, Ch16 The passive, Ch17 Infinitives, Ch18 Participles = Ch5 The declension of nominals (Ch20 Other word classes – 20.2/3) Ch12 Numerals (Ch20 Other word classes – 20.5 Enclitic particles/6 Discourse particles) Ch20 – 20.1 Adverbs Ch20 – 20.4 Conjugation
2.2. Derivational morphology 2.2.6. Complex formations	Ch 21 Word formation 21.1 General 21.2 Derivation 21.3 Compounding
3. Phonology	Ch2 Pronunciation and sound structure
3.1. Phonological units (segmental) 3.2. Phonotacticities 3.3. Suprasegmentals (length, stress, pitch, intonation) 3.4. Morphophonology (segmental) 3.5. Morphophonology (suprasegmental)	(= 2.7 Vowel harmony) (= 2.3 Short and long sounds, 2.6 Stress and intonation) = Ch4 Two important sound alternations
4. Ideophones and interjections	
5. Lexicon	
	Ch22 The colloquial spoken language

表2は、文献①を基準に、文献③がどの部分で対応して記述されているかを示している。

統語に関しては、①は文法的なトピック別に分けているのに対し、③は文の構造および名詞の文法格の用法や動詞の不定形（文末述語以外に使われる、不定詞、分詞、動名詞などの形態）の用法に従ってまとめられているため、それぞれに相応する記述箇所を見つけることは、文法記述の全体を知らないとかなり難しいと言える。形態論は、①は統語的な特徴から分離して語形変化（形態）を詳細に取り上げているのに対し、③は、特に動詞形態論については、その統語的な意味や用法を記述しているため、その結果形態論がかなり多く記述されているように見えている。また③では名詞と形容詞を形態的な特徴から分けずにまとめられ、文の構造に関する記述の中の「名詞句」の説明において統語的な特徴から形容詞を名詞と分けている。また、主たる語形成方法の派生と複合については、③は派生と複合を別項目で扱うのに対し、①では複合を派生の語形

成のなかで捉えている。また、クリティックの扱いに関しても違いがある。

上にあげた文法書の間でいくつかみられる細かい違いの一つに、不定詞の取り扱いがある。フィンランド語では、他の多くのウラル諸語と異なり、不定詞にいくつかの形式があると書かれることが多い。その記述の差と、機能的な違いを表3に示している。

表3 フィンランド語動詞の“不定詞”の分類の相違

受動語幹	単独	小泉	Karlsson	White	Sulkala, Abandolo	
-A		のみ	第1不定詞	A infinitive (1st)	the 1st infinitive	the 1st infinitive
-e-ssA/-n	○	×	第2不定詞	E infinitive (2nd)	the 2nd infinitive	the 2nd infinitive
-mA	○	×	第3不定詞	MA infinitive (3rd)	the 3rd infinitive	the 3rd infinitive
-minen	○		第4不定詞	4th infinitive	the deverbal noun	the 4th infinitive
-mA			動作主分詞	the agent construction	the agent participle	(なし)

※ Sulkala, Abandolo は第3不定詞が動作主分詞としても使われるとする

ウラル諸語の中でも、言語学的研究対象としての記述文法書、そして第二言語として習得を目的とした学習書としての網羅的文法書が揃っていると言えるフィンランド語であるが、記述方法の違いにより、特定の文法項目について参照したいときは容易でない面もあることがわかる。

3. ロシアにおける文法記述の状況

3.1. ロシア式記述文法の分類

次に、ロシア国内のウラル諸語の記述文法書を例に、ロシアにおける少数言語の文法記述の歴史とそのタイプ分類についてみて行く。20世紀に入ってから、ロシア国内の非ロシア語民族の言語が調査、研究され、文字表記方法を持たない言語も記述されるようになり、徐々に言語学的文法書や、言語教育のための教科書、そして様々な対ロシア語の辞書類が出されてきた。これらは、ロシア語文法の枠組みによって記述されており、文法の捉え方にもロシア文法的（より広く印欧語的）な言語観に基づいていると言える。

参照文法書に近い、言語学的な資料となる記述のタイプを分類すると、おおよそ以下のように分けられる。

- I 言語辞典の文法記述
- II 辞書と簡易文法
- III 文法書（規範文法的？）→ 方言ごとの文法記述もある
- IV 民族語教育教材としての文法書や辞書（+会話本）
- V 近年のロシア外の文法記述手法に倣った記述

まず、I-IVのタイプは、いわばロシアにおける伝統的言語記述による文献類といえるだろう。モルドヴァ語や、マリ語、コミ語などのように比較的話者が多い言語では、研究者や言語教育に携わる人が多くなるため、それぞれの文献で著者が異なり、相互に記述内容や分析方法、文法書としての構成などを比べるてみると違いもあると思われる。しかし、少数言語となると研究者の数は限られているので、ただ形式が異なるだけで内容はほぼ同じであるということとはよく見られる。

表4 ロシアの言語辞典における各言語の記載項目一覧

I 語族, 言語グループ, 方言のグループ	
1 名称	4 系統的分類の原則と変異
2 位置と代表言語	5 言語分化の歴史—大語族の場合
3 おおよその話者数	6 典型的な音声—文法の特徴
II 言語に関する内容	
1.1.0. 概論	2.3.0. 意味的文法（言語の形態的類型について）
1.1.1. 名称の種類	2.3.1. 品詞分類の基準；一般的な意味のカテゴリ—的な表現方法（概要）
1.1.2. 系統的内容	2.3.2. 名詞類語彙の特徴
1.1.3. 分布	2.3.3. 数の範疇とその表現
1.2.0. 言語地理的内容	2.3.4. 格の意味とその表現；所有の範疇とその表現
1.2.1. 方言構成の概要	2.3.5. 動詞類語彙の特徴
1.3.0. 社会言語学的内容	2.3.6. デイクティックとその表現方法；名詞と動詞における人称・名詞の定語, 動詞あるいは文の時制範疇, 指示と位置的, アナフォラ, 否定の表現
1.3.1. コミュニケーション機能の状況と言語のランク	2.3.7. 語の意味的文法的順
1.3.2. 標準語化の段階	2.4.0. パラダイム図表
1.3.3. 学習・教育の状況	2.5.0. 形態統語論的内容
1.4.0. 文字	2.5.1. 語形の類型的構造（言語の形態論的發展）；接辞・接中の傾向；変な形態的語順
1.5.0. 簡易言語史	2.5.2. 語形成の基本的な方法と原則
1.6.0. 外的言語接触による構造内的現象	2.5.3. 単純文の典型的構造
2.0.0. 言語学的内容	2.5.4. 複文の基本的構成方法原則；複文の種類；基本的語順の原則
2.1.0. 音韻的内容	2.6.0. 借用語彙の元言語, 量, 役割
2.1.1. 音素一覧と特殊カテゴリー	2.7.0. 方言の体系
2.1.2. プロソディ	
2.1.3. 音素のプロソディの位置的音声実現形	
2.1.4. 音節；長さ対立の存在と状況	
2.2.0. 形態論的内容	
2.2.1. 形態素/語の音韻的構造；音節と形態素の関係	
2.2.2. 形態的単位とカテゴリの音韻的対立の存在	
2.2.3. 音交替のタイプ（形態素レベル）	
III 方言	
1 言語の名称	3 分布—可能な限り話者数
2 方言群における位置付け（文語・標準語との関係, 言語学的特徴）	4 機能的負荷

Iの言語辞典タイプは、これまでに『ソ連邦内民族の言語』や『世界の言語』といったタイトルで、少数民族のみならず、対象となる全ての言語を収録している文献がある。時代や、シリーズにより多少の記載項目に違いがあるが、一番最近に出されているものは表4にあるように、その記述すべき項目が一覧として挙げられている。これらの構成は、ロシア語の文法（ロシア・アカデミ文法など）に準ずるものと見ることができる。ここでの利点は、まず、RoutledgeのDescriptive Grammarシリーズと同じように様々な言語について共通の視点から比較するときには有益である。また、言語を記述しようとするときに、何を書くべきか、何に気をつけるべきかについても良い指針となりえる。完全な理想版というわけではないが、一つの基準とすることができるだろう。また、シリーズによっては、最後に短い言語テキストの例も収録されている（ロシア語記がついているだけで、音韻分析や形態論的分析などは皆無ではある。）ただ、辞典形態を取ることにより、個々の言語に当てられた紙面は多くなく（細かいフォントで詰まっはいるが10-20ページ程度）、広く網羅的に記述しているため、例や細かい点などは割愛されている。

次にIIは、全ての言語でそうであるとは言えないが、特に少数言語においては、文法記述付きの辞書が用意されていることがある。数万語規模の比較的大きい辞書の最後に付録として簡易文法がつけられている例であり、60-100ページくらいにも及ぶ量と内容についてもIタイプの記述よりも豊かである。多くの語彙や文の例、変化のパラダイムも載っていることが特徴的である。次に見るIIIタイプの文法書が、例等が増えて全体的な分量が多いがために使いづらいというのであれば、このIIタイプにあたるとより手早く文法全体をつかむことができる。

IIIのタイプは、上のIとIIが十分な1冊の文献となった規模で、記述内容も、例文の数も多い重厚なタイプと言える。文法項目や構成はほとんど変わらないため、IやIIに慣れていればだいたいどこに何について書いているかの推測はしやすい。しかし、語や例文の示し方に工夫は見られず、説明文の中に連続で並べられるものが多く、形態素に分けて示す例もほとんどなく、ロシア語の対訳が後続するだけである。そのため、分量が増えた分、見にくさも増えるという印象がつきまとう。

IVのタイプには、小学生や中学生レベルの少数民族の子供たちを対象とした教科書から、そういった民族語を教える立場になる語学教師向けに作られた文法書がある。言語学的な研究というよりも、言語教育的な面が強いため、参照文法書と呼べるようなものは多くないが、語学的な観点から文法をみる際にはわかりやすく有益と言える。また、教師向けの文法書は名詞や動詞のパラダイムの変化タイプ別の例示も多い。

最後に、Vのタイプは、これまで見たロシア内での慣例に基づいて記述される文法ではなく、英米やドイツ、フィンランドなどの西欧の言語学的な記述によった文法書で、ロシア人ではない研究者のものもあるが、ロシア人でも西欧的な枠組みで書かれた文法もある。日本における言語学や記述文法の立場からは、親しみやすい記述といえるかもしれない。数は決して多いとは言えないが、(ソ連崩壊後)近年いくつか出版されている。

3.2. サモエード諸語を例に（ネネツ語の文法記述の歴史）

ここでは、サモエード諸語を例に、参照文法書の状況を見てみたい。

表5は、サモエード諸語に属する現在話者のいる4言語の文法書の状況をまとめたものである。話者の多いネネツ語やセリクブ語では、他と比べて様々な文法書が出されているのに対し、消滅に瀕したガナサン語やエネツ語はそれほど記述自体が多いとは言えない。

表5 サモエード諸語について文法書の状況

Type	ガナサン語	エネツ語	ネネツ語	セリクブ語
I	○	○	○	○
II	×?	△	○	△?
III	○	○	○	○
IV	△	△	○	○
V	×	○	○	△

次に、多くのタイプの文法書があるネネツ語の文献について見てみる。下に、各タイプごとの文法書をいくつか挙げている。

Type I

Терещенко Н. М. 1966. Ненецкий язык // *Языки народов СССР. том 3: Финно-угорские языки*, М., Наука.

———. 1993. Ненецкий язык // *Языки мира: Уральские языки*, М.: Наука.

Type II

Терещенко Н. М. 1965. *Ненецко-русский словарь*, М., Наук.

Type III

Терещенко Н. М. 1947. *Очерк грамматики ненецкого (юрако-самоедского) языка*. Л.: Учпедгиз.

Type IV

Куприянова З. Н., Бармич М. Я., Хомич Л. В. 1985. *Ненецкий язык. Учебное пособие для педагогических училищ. Издание 4-е, переработанное*. Л., Просвещение.

Алмазова А. В. 1961. *Самоучитель ненецкого языка*. Л. Учпедгиз.

(Прокофьев Г. Н. 1936. *Самоучитель ненецкого языка*. Л. Учпедгиз.)

Терещенко Н. М. 1959. *В помощь самостоятельно изучающим ненецкого языка (опыт сопоставительной грамматики ненецкого и русского языков)*, Л. Учпедгиз.

Type V

Nikolaeva, Irina. 2014. *A Grammar of Tundra Nenets*, Mouton de Gruyter.

Salminen, Tapani 1998. "Nenets" in *The Uralic Languages ed. by D. Abondolo*, Routledge, London and New York.

(———. 1997. *Tundra Nenets Inflection*, SUS, Helsinki.)

(———. 1998. *Morphological Dictionary of Tundra Nenets*, SUS, Helsinki.)

文法記述の枠組みは、I-IV のロシア伝統式と、V タイプの Salminen 式で、特に形態論で大きく異なる。Salminen 式の形態分析は形態音韻論的な点をかなり重視して分析するのに対して、ロシア伝統方式では形式的な形態分析で名詞や動詞の活用タイプを分類している。

表6は、これら二つの分析の間の、具体的な違いを示している。

表6 ネットの名詞・動詞の形態分析の違い

	ロシア伝統式 (I-IV)	Salminen 式 (V)
・ 名詞・動詞の曲用変化タイプ		
規則型	母音語幹型 子音語幹型	母音語幹 子音語幹
語幹末音交替型	/ʌ/型 = [ʔ]-[n]/[v] /ɸ/型 = [ʔ]-[d/s]/[ɸ]	混合語幹 glide 語幹
・ 動詞の時制	不定・過去・未来	アオリスト・過去
・ 動詞の法 mood	6 種類	16 種類
・ 動詞の non-finite form	動名詞 (11 種類) 形動詞 (4 種類) 副動詞 (3 種類)	不定詞 (2 種類) 分詞 (4 種類) ジェラント gerund 従属形 subordinate 否定分詞 connegative
・ 動詞のアスペクトの扱い	いわゆる“アスペクト”接辞 習慣相, 完了相など	動詞の派生形として扱う 未来, (受動), 他動詞・自動詞もここに
	注: 他動詞・自動詞は別の項目	

名詞と動詞の形態変化のタイプ分類には、共通して語末の子音の交替が挙げられる。ロシア伝統式では、語末子音交替のパターンで分類するが、Salminen 式はより規則的な変化をするものを母音語幹動詞と子音語幹動詞とに分け、数としては少ない例外的な変化をするものを混合語幹と glide 語幹に分けている。

一方、動詞の文法カテゴリーを示す形態については大きな違いが見られる。例えば時制のちがいは、Salminen 式では未来を認めてないことによる（時制の名称は異なるが指している接辞は同一）。これは、未来を表す接辞は動詞語幹に直接つき、人称語尾は現在と過去の時と同じであることによるが、実は過去形も現在形の末尾に過去を示すクリティックのようなものがつくだけで作られる。形態的な条件だけではなく、他の要素を考慮に入れた結果、異なる分析がなされているといえよう。他にも、示しているように、動詞の法（ムード、モダリティ）、不定形の分類方法にも大きな差があることがわかる。文法記述する研究者によってここまで大きな差があるということは、参照する際にも気をつけなければならない点であると言える。またロシア国内の他の少数言語がネット語と似たような文法枠組みで記述されてきていることを考え合わせると、他の諸言語においても、前提となる伝統的なロシア語文法記述枠組みから解き放たれた、より客観的な視点から再度文法を考え直す必要があるとも言えよう。

4. まとめ

以上、ウラル諸語の文法記述について、フィンランド語文法を例に西歐式記述を、そしてネネツ語文法を例にロシア式記述を見てきた。双方において異なる特徴も確かにあるが、共通して言えることはどのような枠組みで書かれているかという、文法の枠組み全体像を見なければならぬ、という点であろう。言語研究では、ある文法特徴について他言語の例を参照して対照させることがよくあるが、その記述された文法は書き手の持つ文法概念が強く反映されていることに気をつけねばならない。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016-2017年度）の成果の一部である。

参考文献

- Marcantonio, Angela. 2002. *The Uralic Language Family—Facts, Myths and Statistics*. Oxford and Boston: Blackwell.
- 小泉保 1991 『ウラル語のはなし』東京：大学書林。